

日銀の視点

茨城県は四季のうつろいはつきりしており、1年の変化を実感できる真だというところか。過去に転勤で、雪深い大地で生活した経験もある。その話すと、北国ほどではないと言われるかもしれないが、そうではない。

まず、冬だけが長いこともなく、四季が均等に感じられ、各季節にメリハリがある。広い平野部には、春は水を張った水田や畑の新芽の光景が随所に広がり、咲き乱れる花々から季節の訪れを実感でき

日銀水戸事務所長 稲見 征史

本県の四季にみる風情

夏は濃い緑があふれ、夏の雲とのコントラストが美しい、そして秋は山の紅葉に田畑の実りが色を添える。冬は土色の面積が増え、静かな季節となるが、春に備える静寂があり、沈む太陽が澄んだ空

農漁業を主体に産業が歴史的に形成されてきた。人の手が入った土地と自然の融合が、変化に富む四季の色合いを生み出すことに影響している。他にはない、本県の豊かさや生活基盤を象徴するものだ。

は一頃滞りし複数の作品を残している。静かに佇む景色に心を惹かれるとの巴水の残した言葉が、作品に結実していると感じた。70年以上も前のことで、工業化や都市化が進んだ現在とは大きく異なる部分はあるが、作品が共感を呼ぶのは、その風景や風情が今につ

久沼の夕景など列挙しきれないほどだ。自然・文化・生活が溶け合った美に魅了されているのだろう。

最近の中東情勢の緊迫化は石油関連製品に留まらず広く物価や供給網に影響を及ぼす可能性がある。私たちの生活に不安な影を落としかねず、事態を注視している。そうした中でも、本県の美しい四季や変化に富んだ風景とその日常は、安らぎを与え、着実な日々の営みの大切さを思い出させてくれる。心が落ち着くとともに、複雑に絡み合う世界経済は不断の連携と共助により安定が確保されていることの重要性に改めて気づく。

と大地を赤く染める。わが国を空から見ると殆どが山間部で狭い平地に人々が生活しているが、本県は可住地域が広い点に代表されるように、平野が多く、ほどよく起伏や山もあり、湖沼や海と接した地域も多い。そこで、

水戸市内で開催された川瀬巴水展に訪れてみた。著名な風景版画の絵師は全国を巡り、各地を描いたが、本県の作品は多い方に入るといえる。海や湖沼など水辺との接点の中で人々の生活を感じられるものが多く、特に水郷地区に

ながっていることを感じ取れるからではないか。実は、本県の古今の色合いが残る風景は、現代の風景写真愛好家にも人気がある。ひたち海浜公園の花々、鹿島臨海工業地帯の夜景、大洗の神磯鳥居からの朝陽、酒沼や牛